

西田哲学とヴント心理学の「直接経験」

——その無基体的性格について——

中 嶋 優 太

はじめに

本稿では西田幾多郎の最初の著作『善の研究』に対するヴント心理学の影響に注目することで、西田の思想形成の背景を明らかにする。

W・ヴントは今日では実験心理学の祖として理解されることが多く、心理学という異分野の研究者の思想からの影響を西田哲学に対して論じることには疑問が持たれるかもしれない。しかし、西田が『善の研究』を執筆した明治の後期においては、哲学の議論に際して心理学の知見が利用されることは珍しいことではなく、それどころか心理学に基づいた哲学や倫理学の構築も試みられていた（たとえば元良勇次郎「倫理学は哲学かはた科学か」『六合雑誌』一八九〇年）。西田自身、のちに『善の研究』となる論考を執筆していた四高教授時代には「倫理学」

などととともに「心理学」の講義を行い、その際、W・ヴントの『心理学概論』(*Grundriss der Psychologie*)を講義の種本として用いている。

『善の研究』をはじめ前期の西田の哲学論文の中にもW・ヴントを含む多くの心理学者たちの議論が、時に肯定的に援用され、時に批判される形で数多く登場している。心理学者のみならず、西田が引用する思想家の中には、当時は有名であっても、今日では名前が忘れられているものもある。西田の引用の仕方の不親切さもあって、それは現代の哲学研究者が西田哲学の形成の背景を理解することを阻む要因の一つになっている。心理学のような異分野の思想家との関連はさらに見えにくくなっており、両者を比較し、西田への影響関係を明らかにすることが必要である。

本稿では、まず西田がヴント心理学を学び、それを踏まえて

『善の研究』を書いたことを、とりわけ「直接経験」という鍵語に焦点を当てて示す。西田にとって「直接経験」は「純粹経験」と言い換え可能な鍵語であり、彼が唯一の実在であるととした「意識現象」を意味していた。W・ヴントにとって「直接経験」は「間接経験」と対比され、彼の心理学の固有の対象を意味していた。次に西田がヴント心理学の要素主義的性格を批判していたことを確認する。そのうえで、両者が、魂、身体といった意識の基体の想定を批判していた点に注目して、W・ヴントの要素主義的議論の中に積極的な側面がなかったかを検討し、西田がヴント心理学の議論を巧みに利用していたことを明らかにする。西田はもちろんヴント心理学の考え方を全面的に受け入れたわけではないが、そこから刺激を受け、その思想を部分的に利用しながら自身の哲学を構築していた。そうした西田の思想形成の背景を明らかにしたい。

一 「純粹経験は直接経験と同一である」

まず、「直接経験」という語を手がかりに、西田とヴント心理学の関係を考えたい。『善の研究』第一編「純粹経験」第一章「純粹経験」の冒頭の段落で西田は次のように述べる。

「純粹といふのは、普通に経験といつて居る者も其実は何等かの思想を交へて居るから、毫も思慮分別を加へない、真に経験其儘の状態をいふのである。…それで純粹経験は直接経験と同一である」(一、九頁)。

『善の研究』の中では「純粹経験」と「直接経験」はほぼ言い換え可能な表現として用いられる¹⁾。しかし、同じ段落中で、引き続き次のように語られるから、ここでの「直接経験」はヴント心理学を念頭に語られたと見るべきである。

「普通には経験という語の意義が明に定まつて居らず、W・ヴントの如きは経験に基づいて推理せられたる知識をも間接経験と名づけ、物理学、化学などを間接経験の学と称して居る(Wundt, Grundriss der Psychologie, Einl. S.1)。併し此等の知識は正当の意味に於て経験といふことができぬ」(一、九十頁)。

「直接経験」と「間接経験」はヴント心理学上の対概念であり、W・ヴントは『心理学概論』の中で科学を直接経験の学と間接経験の学に分する考えを提示していた。前の二つの引用文において西田が語っているのは、W・ヴントの「直接経験」「間接経験」の対比の中で見るならば、西田の「純粹経験」は「間接経験」ではなく「直接経験」に近いということである。

二 直接経験の学としての心理学

そもそもW・ヴントはどのような仕方ですら直接経験と間接経験を区別、対比したのか。彼は『心理学概論』で、自然科学と心理学とを区分するために間接経験と直接経験の区別を導入する。この議論の背後には経験的心理学固有の対象を、一方で旧来の靈魂論的心理学(die spiritualistische Psychologie)

の対象である形而上学的靈魂実体 (eine metaphysische Seelensubstanz) から、他方で心理学に先立って発達していた自然科学の対象から区別して確保し、科学としての自立性を主張しなければならなかった創成期の心理学の悩みがあった。「直接経験」は心理学固有の対象を示すための用語である。

「どの経験も直ちに二つの因子、即ち我々に与えられる内容と、我々のこうした内容の把握とに分かれることから、これらの二つの観点が生じてくる。我々はこれらの因子の内、第一のものを経験の対象、第二のものを経験する主観と呼ぶ。このことから、経験の扱ひ方に二つの方向が生じる。：自然科学的な立場は各々の実際経験には含まれていゝる主観因子を捨象することによつてはじめて可能であるといふ意味で間接経験の立場と呼ばれることが出来、それに対して心理学的な立場はこうした捨象操作とそうした捨象操作に起因するすべての帰結を故意に帳消しにするが故に直接経験の立場と呼ばれることが出来る」(W. 1, 2)。

W・ヴントによればどのような経験も主観因子と客観因子を持つ。そのうち、主観因子を捨象した経験、つまり取り出された客観因子を間接経験、主観因子を具備した元の経験全体が直接経験と呼ばれる。W・ヴントが間接経験を直接経験と区別し、心理学の対象を直接経験と呼んだ背景には、我々が無意識のうち主観因子を捨象しており、むしろ我々は日常的には間接経験のほうに慣れ親しんでいる、という洞察がある。たとえば、

一枚の白紙を半分に切り、一方を窓際に、他方を暗い廊下側に掲示する。一方は輝いて、他方はくすんで見えるにもかかわらず、二枚の紙は同じ白さを持つていと考えられる。我々にとつては紙という客観の同一性のほうが重要であるために、見えるの差異は主観因子として捨象されているのである。W・ヴントは経験から主観因子を捨象し、客観因子のみに注目するこうした態度を意識化するために間接経験という語を用い、またそうしたほとんど気づかれない捨象操作以前の経験全体に注意を向けるために直接経験という語を用いた。

西田が彼の「純粹経験」とW・ヴントの「直接経験」との間に見出した同類性は明らかである。西田もまた、「純粹といふのは、普通に経験といつて居る者も其実は何等かの思想を交へて居るから、毫も思慮分別を加へない、真に経験其儘の状態をいふのである」(一、九頁)と述べ、抽象操作以前の経験全体を純粹経験と呼んでいた。

三 要素主義批判

西田は、W・ヴントの「直接経験」の考え方に共感を示すが、ヴント心理学を全面的に評価していたのでないことはこれまでの研究でも明らかになっている。たとえば、竹内良知は西田の「直接経験」の概念が、少なくとも部分的には、W・ヴントの『心理学概論』から受け取られたことを認めた上で、さらに「ジエームズが、『意識の流れ』の理論において、ヴントの『直接

「経験」の概念には「含まれていた要素主義的傾向をさすべく批判」したことを知ることが『善の研究』の思想を形作る上で重要であったと指摘する。

ヴント心理学が何らかの意味で要素主義的であったこと、そして西田がW・ジェームズとともにそうした要素主義的傾向に反対していたことは確かである。ヴント心理学の要素主義的傾向とは、心的現象をそれ以上分割することのできない心的要素 (die psychischen Elemente) に分析し、そうした要素の組み合わせ、心的複合体として複雑な現実の心的プロセスを説明するものである。W・ヴントは心的要素について次のように述べている。

「すべての心的な経験内容は複合的な材料からなるものなので、絶対的に単純 (einfach) で不可分離的な (unzerlegbar) 心的出来事⁽¹⁾の材料という意味での心的諸要素は、分析の結果であるばかりでなく、抽象の結果である」(W. 5, 1)。

W・ヴントは客観的な心的要素を感覚要素 (Empfindungselemente)、『主観的な心的要素を感情要素 (Gefühlselemente)』あるいは単純感情 (einfache Gefühle) と呼ぶ⁽²⁾。これらの単純な心的要素が、分析と抽象の結果であり、現実の心的内容ではないことを彼も理解している。しかし、彼は心理学の課題を次のようにとらえ、複合的な直接経験を感覚要素や単純感情という心的要素の連結として説明している。こうした課題設定そのものに彼に染みついた要素主義的発想を読み取る

ことが出来る。

「最初のもの〔課題〕は複合的なプロセスを分析するところであり、第二は、その分析によって見出された諸要素の相互的な結合を証明するところであり、第三は、こうした結合が生じる際に働く法則を研究するところにある」(W. 4, 1)。

西田は不可分離的な心的要素を想定し、心的プロセスをその複合体として説明するW・ヴントのこうした議論に満足していない。

「純粹経験の直接にして純粹なる所以は、単一であつて、分析ができぬとか、瞬間的であるとかいうことにあるのではない。反つて具體的意識の嚴密なる統一にあるのである。意識は決して心理学者の所謂単一なる精神的要素の結合より成つたものではなく、元來一の体系を成したものである」(一、十二頁)。

ここでいわれている「心理学者」は必ずしもW・ヴントだけを指したものとはいえない。だがW・ヴントもそれ以上分割することのできない単一な (einfach) 心的要素を想定している点で、ここで批判されるべき心理学者の一員に数えることができる⁽³⁾。

四 ヴント心理学の基体性批判と全体意識

W・ヴントの「直接経験」の概念が西田の「純粹経験」と類

似していること、およびそれにもかかわらず要素主義的傾向を残しているという点で、西田はヴント心理学に対して批判的な立場にあったことは、これまでの研究でも部分的に言及されてきた事柄であった。しかし、W・ヴントの要素主義的な議論は西田にとって本当に否定的な意味しか持たなかったのだろうか。ここでは、両者が、魂、身体といった意識の基体の想定を批判していた点に注目して、西田がW・ヴントの要素主義的議論を部分的に利用していたことを明らかにする。

すでに述べたように『心理学概論』においてW・ヴントは彼の経験的心理学の対象を特徴付けるために「直接経験」という語を用いた。それに対して、旧来の形而上学的心理学（*metaphysische Psychologie*）の特徴を「心的プロセスを他の心的プロセスから導き出すのではなく、特殊な靈魂実体の働きからあれ、物質の性質とプロセスからあれ、心的プロセスとは全く異なる基体から導き出す点」（W. 2, 1）に求める。つまり諸々の心的プロセスに対して、何らかの仕方での基体を想定することが形而上学的心理学の特徴である。そこには、基体を靈魂実体とする靈魂実体（*die Seelensubstanz*）と考える靈魂論的心理学、基体を物質的なものとする唯物論的心理学が含まれる。

翻って、経験的心理学の特徴は、心的現象とは異なった他の基体を想定することなく、心的プロセスとその連関によって心的現象を説明する点にある。

「∴それ〔経験的心理学〕は、心的プロセスをこうしたプロセスの連関から直に取られた概念へ連れ戻し、あるいは、特定の、しかも原則的には単純な（*einfach*）心的プロセスを利用して、その連関プロセスから他の複雑なプロセスを導出しようと努める」（W. 2, 2）。

ここで心的現象の無基体性の主張が、心的現象を心的要素とその結合によって説明する要素主義的な発想と結びついている点にも注目すべきである。心的現象は心的要素の結合によって成立するのであり、そうした心的要素の結合に基づく基体を考えるべきではない。我々はその時々さまさまな心的現象を経験するが、それを心的現象として考察するならば、たださまさまに変化する心的要素の結合があるだけであり、その後に変化しない魂や身体を考えることは形而上学的仮説の混入として退けられることになる。

こうした無基体性の主張は意識についてのW・ヴントの考えにも反映されている。

「したがって意識という概念は、心的な諸プロセスと別にあるものではない。またこの概念は、諸プロセスが互に関係するありさまを度外視した、諸プロセスの単なる総和を指示しているのでもない。そうではなくて、意識という概念の意義は、一層親密な結合として際立ってくる個々の複合体を含む、心的な諸プロセスの、あの総体的な結合（*Verbindung*）を表現する点にある」（W. 15, 1）。

W・ヴァントによれば、諸々の心的要素の結合した心的プロセスが表象、情緒、意志プロセスなどの心的複合体 (Geldie) であり、そうした心的複合体が同時的および継起的に結合した心的プロセスが意識である。このように心的プロセスの結合であると考えられる意識は、必ずしも個人に結び付けられたものではなく、心的プロセスの結合が現れる限り、意識の概念は個人を超えても適用される。

「同時的な心的諸プロセス、および時間上において継起する心的諸プロセスの包括的な連関 (ein umfassender Zusammenhang)」という意味での意識は、さしあたっては、個人の心的な生の表出という形で、個人意識として我々の経験に現れる。しかしながら、類似した連関は諸個人の結合においても、少なくとも心的生活の特定の側面においては、現れうるのだから、意識という同じ一般概念の内に、全体意識、民族意識などの概念を含めることができる」(W. 15, 1)。

意識の概念を個人を超えて適用するこの論点は、彼の民族心理学の発想に結びつくものである。しばしば実験心理学の祖としてのイメージが強調されるが、W・ヴァント自身は、実験的・生理学的心理学は心理学の一分野に過ぎないと考えていた。個人意識を対象とした実験心理学とともに、観察に基づく民族心理学はヴァント心理学の二つの軸である。彼の心理学の構想は実験心理学に限定されたものではなく、文化史的研究を含むかな

り野心的なものであった。そうした民族心理学の中心概念となる全体意識について『心理学概論』では次のように語られている。

「精神的な連帯 (Gemeinschaften)」、とりわけそうした連帯の中で際立っている言語、神話、道徳の発展の中で、我々には精神的な連関と相互作用が生じる。この連関と相互作用は本質的に個人的意識における複合体の連関の関係とは区別されるけれども、それゆえに実在性が少ないとはみなされない。それゆえこの意味で人はある民族社会内部の諸表象、諸感情の連関を全体意識と呼び、共通する意志傾向を全体意志と呼ぶことができる」(W. S. 21, 14)。

ここでヴァントが全体意識を個人的な意識と区別しつつも、そこに個人的意識と同等の実在性を認めていることに注意する必要がある。この論点は、W・ヴァント自身にとっては彼の民族心理学を擁護するための議論であるが、次節で紹介するように西田もまた同様の主張を行っている。

五 初期西田哲学における意識の無基体性

W・ヴァントは身体、および魂などの基体に基づいて意識現象を説明する議論を拒否し、あくまでも心的要素の結合した諸複体の連関として意識をとらえた。また、意識を無基体的に意識プロセスの連関としてとらえる場合、その意識は原理的には基体としての個人に制限されたものではなく、超個人的な意識

にも個人的意識と等しい实在性が与えられなければならないと考えた。

西田の考える意識現象も必ずしも個人的意識に限定されたものではない。本節では西田の意識理解の基本的性格を確認し、そうした意識理解を確立する上で前述のヴントの議論がどのように利用されているのかを確認する。

「個人あつて経験あるにあらず、経験あつて個人あるのである、個人的区別よりも経験が根本的である」(一、四頁)という『善の研究』序の有名な一節が物語っているように、西田の考える経験は必ずしも個人的経験に限られたものではない。こうした個人的区別を相対化する主張の背景には、意識に統一があること、意識に所有者があることについての次のような理解がある。

「併し意識は必ず誰かの意識でなければならぬといふのは、単に意識には必ず統一がなければならぬといふの意にすぎない。若しこれ以上に所有者がなければならぬとの考ならば、それは明に独断である。然るに此統一作用即ち統覚といふのは、類似せる観念感情が中枢となつて意識を統一するといふまでであつて、この意識統一の範囲なる者が、純粹経験の立場より見て、彼我の間に絶対的分別をなすことはできぬ」(一、五五頁)。

意識が誰かの意識である、ということをも西田も認めないわけではないが、それは意識の所有者である誰かが存在するという

意味ではなく、ただ意識には常に統一があり、誰かの意識という場合の「誰か」とはこの統一を言い表しているに過ぎないと考えられている。個人を前提して意識を考えるのではなく、意識統一があるということから、その意識の「誰か」が定まってくる。こうした発想によつて西田は彼我の差、個人対個人の区別の絶対性を否定している。この意識の所有者を不要とする議論はW・ヴントの基体批判と通底する。

また、西田はW・ヴントと同様に超個人的な意識を認め、それに個人的意識と同等の实在性を認めている。この論点については統一的意識の实在性を否定するヘフディングの主張を引き合いに出しつつ、それに反論する形で議論が行われている。西田はヘフディングの議論を次のようにとらえている。

「共同的意識なる者が個人的意識と同一の意味に於て存在する者で、一の人格と見ることができるか否かに至つては種々の異論がある。ヘフディングなどは統一的意識の实在を否定し、森は木の集合であつて之を分てば森なる者がない、社会も個人の集合で個人の外に社会といふ独立なる存在はないといつて居る(Höfding, Ethik, S. 157)」(一、一六〇頁)。

西田がヘフディングの議論の中で注目しているのは、要素に分析することのできるものは何であれ实在性を持たない、と考えられている点である。森は木に分解できるが故に、それ自体として实在性を持たない。それと同様に、社会は個人に分解で

きるが故に、それ自体としては実在性を持たない。ヘフディングの主張をこのように受け取った上で、西田は反論を行っている。

「併し分析した上で統一が実在せぬから統一がないとはいわれぬ。個人の意識でも之を分析すれば別に統一的自己といふ者は見出されない。併し統一の上の一つの特色があつて、種々の現象は此統一に由つて成立する者と見做さねばならぬから、一つの生きた実在と看做すのである。社会的意識も同一の理由に由つて一つの生きた実在と見ることが出来る。社会的意識にも個人的意識と同じ様に中心もある連絡もある立派に一の体系である」(一、一六〇頁)。

西田によれば、個人の意識も分解しようとするれば分解できるのであり、その場合意識とは別に統一的自己がいるわけではない。したがって、ヘフディングの主張のように分析されるものはそれ自体として実在性を持たないのだとすれば個人の意識もまた社会と同様に実在性を持たないとしなければならなくなる。西田にとつて分析可能か否かという観点は、その実在性を判断する決定的な根拠ではない。むしろ西田は社会的意識であれ、個人的意識であれ、単一で分割不可能なものではなく、どちらにせよ何らかの多様なプロセスを統一したものであると考へる。したがって意識は多かれ少なかれ分析可能ではあるが、その意識統一のユニークさによつて実在性が語られるのである。

こうした西田の議論は、意識を諸々の心的プロセスの連関としてとらえるW・ヴントの議論によく似ている。三節で指摘したように、西田は要素主義的心理学を批判してはいたが、その批判はそれ以上分割不可能な心的要素を想定する発想に向けられていたわけであり、個人的意識を不可分で単純なものだと考へていたわけではない。それ以上分割不可能な心的要素があるという強い主張を排除すれば、意識が多様な諸々の要素に分割されうるとする要素主義の分解の手法は西田自身も利用しているのであり、意識とはその統一、体系を意味しているとする点は共通している。こうした統一としての意識という観点によつて、不可分な個人という基体の発想に揺さぶりをかけているのである。

おわりに

本稿では、まず西田の純粹経験概念とW・ヴントの直接経験概念との相似性、およびヴント心理学の要素主義的性格に対する西田の不満という従来から指摘されて来た論点を整理した上で、両者の近さを、経験や意識を身体や魂といった個人的基体から解放し、動的に発展する連関、統一としてとらえる点に求めた。こうした両者の経験理解、意識理解の無基体的性格に注目するならば、W・ヴントの要素主義的な議論にも部分的に見直すべき点があり、西田もその点を利用して見ることが分かる。すなわち、個人という基体の絶対性に揺さぶりをかけるた

めには、個人の意識を分解し、それをさまざまな心的プロセスの複合体であると考えられる分解の手法が有効なのである。さらに、ここでは詳論することはできないが、『善の研究』以降の論文でも、W・ヴントの「活動概念 (Aktualitätsbegriff)」（論文「感覚」三、三二頁。W. 22, 6）や「創造的総合の原理 (ein Princip schöpferischer Synthese)」（意識とは何を意味するか）三、一〇頁。W. 23, 3）を好意的な仕方で見つけ合ひに出して意識の動的発展の性格を論じており、西田がヴント心理学から積極的な影響を受けていたことが分かる。

西田におけるこうした分解の手法をさらに明らかにするには、心理学に注目した本稿と同様に、諸科学の成果を貪欲に取り入れようとした西田の議論に注目し、異分野間での比較研究が有効である様に思われる。詳しく論じることができないが、たとえば社会学者ガブリエル・タルドの思想や、H・コーエンを介した微分論に対して西田が関心を抱いたことなどが注目に値する。そこでは、分解の手法はより洗練され、無限小への分解となり、W・ヴントに残っていた要素を絶対化する要素主義的側面は克服されることになる。

同時代の諸科学の成果を貪欲に吸収しながら思索した西田の思想をとらえる上では、哲学という狭い分野の中だけでは不十分であり、西田研究には分野を跨いだ研究が必要ではないか。本稿はそうした研究の小さな一例である。

参考文献

- 西田幾多郎『西田幾多郎全集』岩波書店、一九六五年。『西田幾多郎全集』からの引用は巻数と頁数を記す。
- W・Wundt, *Grundriss der Psychologie*, Leipzig, Wilhelm Engelmann, 1896. 『心理学概論』と表記す。ヴント『心理学概論』からの引用は略号 W を用い、節数と条数を記す。
- 石田幸平「解説」『体験と認識』東北大学出版会、二〇〇二年。
- 高橋淳子「実験心理学の独立—ヴント」梅本堯夫・大山正編著『心理学史への招待—現代心理学の背景』サイエンス社、一九九四年。
- 竹内良知『西田幾多郎』東京大学出版会、一九七〇年。
- 平山洋『西田哲学の再構築—その成立過程と比較思想』ミネルヴァ書房、一九九七年。

- (1) 平山は西田が当初、「純粹経験」と「直接経験」という語を混用していたことを指摘するとともに、『善の研究』だけでなく『心理学講義』『倫理学草案第二』『純粹経験に関する断章』をも考察の対象として、その成立時期の推定を行い、西田が一旦用語を「直接経験」に統一した後、『善の研究』第一編『純粹経験』の中で「純粹経験」という語の使用が復活したと推定している。平山『西田哲学の再構築』。
- (2) 竹内『西田幾多郎』一九四頁。
- (3) 要素主義的傾向はヴント心理学固有の特徴ではなく、同時代の心理学者に広く見られる傾向であった。石田「解説」および高橋「実験心理学の独立」。

(なかじま・ゆうた、西田哲学・日本哲学史、
石川県西田幾多郎記念哲学館専門員)